論文の和文要旨	
論文題目	内モンゴルにおける民族教科書に関する研究 ―教科書の教育的な役割と文化的な多様性に着目して―
氏名	白　双竜

本論は内モンゴルにおける民族学校用「モンゴル語教科書」の記述内容の現状と変遷、およびその教育的な役割について分析と考察を行った。民族学校、義務教育段階における「モンゴル語教科書」の記述内容について比較分析を行い、人間形成の基礎を養うべき義務教育段階用「モンゴル語教科書」内容に込められた教育的な役割をも調査、分析することを試みた。この一連の調査と分析によって、民族教科書自体が本来有すべき地域的で民族的な個性とはどのようなものであるべきかを探求した。そして、民族教科書が、地域性を保持しながらも多文化社会構築への貢献、ひいてはグローバル化社会や国際化における文化の多様性に対応できるような、児童生徒たちの知力を育成する基盤となる方向性を検討した。よって本研究は民族教科書編纂による今後の課題までを射程に入れた研究であるといえよう。

本論は８つの章から成り立っており、以下、各章の調査と考察における研究成果を簡単にまとめたい。

まず、序章では本論の背景、研究目的とその方法、ならびに構成について述べた。民族教育に関しては言語教育政策、アイデンティティ教育をめぐる研究蓄積が多くみられる。教科書は国民形成、人間形成による極めて重要な役割を果たしているため、多民族国家である中国においては、長年これら民族教科書をめぐる教育改革が大きな課題となっている。近年には、民族学校における「国家統編教材」の使用が義務化された一方で、民族学校の義務教育段階用の「モンゴル語教科書」の記述内容に関しては、系統的に分析した先行研究が見当たらないことが、これまでの民族教科書研究の現状であった。そこで、本論では、民族学校の義務教育全段における「モンゴル語教科書」の教育的で文化的な役割を探り、民族教科書本来の目的にそった「モンゴル語教科書」の記述内容を分析することを第一の命題として設定した。

第一章では中国・内モンゴルにおける学校教育体制や民族教育の概説とその位置づけを整理し、民族教育における先行研究の現状とその方向性を検討したうえ、今後の課題を提示した。内モンゴルにおける民族教育に関する先行研究では、民族教育政策の立法方案、言語教育政策、アイデンティティ教育をめぐる研究が多く、民族教科書に関する研究はまだ十分になされていない。一方で、民族教科書を分析した先行研究においては、分析対象も非常に少ないのが現状であり、分析内容や研究方法には限界がある。そのため、民族学校における民族教科書研究では、まずは分析対象とした教科書を系統的、体系的に分析し、その教育的、または文化的な役割についてグローバル化、国際化に対応し得る多文化教育の視点に帰着させて設定することが重要であるとの結論を提示した。

第二章では民族教科書の発展経緯を明らかにし、民族教科書と民族教科書制度の歴史的な源流とその発展経路の整理を行った。その上で、民族教科書と各時代の社会における位置づけ、またその役割についても独自の調査を行い、事実の究明を果たした。その結果、中華民国、および満州国におけるモンゴル語の雑誌または教科書の内容などには、当時のモンゴル王公や知識人階級の人々のモンゴル地域・社会の発展を呼びかけるための文化的で政治的な内容が多かったことが判明した。しかしながら、当時はこのような呼びかけが、社会や政治状況によって、支配勢力や

政府から大きく制約されていたことも同時に確認することができた。

この点から、当時のモンゴル語雑誌における、民族文化を宣伝、継承するという教育的な役割には、当時の支配勢力による政治的な意向が強く反映されていることが明らかになった。さらに、新中国(1949)の成立当初、教科書編纂については「国定制」が実施され、教育を通じて各民族における国民性を養成することが図られていたものの、その後、「新課程」改革によって児童生徒の総合資質や能力の育成が図られると、教科書制度もまた「国定制」から「検定制」へと改革された。この教科書の「検定制」によって、各民族地域の文化的な特徴に応じた教科書の編纂が可能となることは予測されるものであった。そこで、実際の教科書内容にはどのような変遷をもたらし、また、その変遷がどのような教育的で文化的な役割を果たし得たかについて、実際の教科書内容をさらに詳細に分析、考察することが必要であるとの結論を導き出した。

第三章では新中国における民族教科書制度の変遷、およびその発展について整理と分析を試みた。新中国成立以来、内モンゴルにおける民族教科書と教科書編纂制度の歴史的な発展経緯は、建国初期の「国定制」(1950～1986)から改革開放期による「検定制」(1986～2020)への改革、そして、現在、多文化の発展、情報化の進化、さらなるグローバル化世界による経済高度成長などが大きく影響を与えることとなった点に着目した。またこれによって、国家との一体感や国民性の育成が、これまでよりも一層強く求められるようになっていった。さらに、民族学校における「国家統編教材」の使用が義務化されたことにより、民族教科書による編纂制自体が再び「国定制」へと傾いていった経緯を詳細に調査して指摘した。

第四章では先行研究における教科書研究理論、およびその分析方法を概観するとともに、本論における具体的な分析方法について説明を行った。そのうえ、本論による分析方法の正当性について論じるだけでなく、その分析方法の限界についても言及した。

尚、本論においては、教科書研究における「教科内容研究」の研究方法を取り入れることを試みた。まずこの「教科内容研究」とは、一般的には、研究や調査対象に関する内容を分析することをいう。つまり、各教科書には、どのような内容が記述されているのか、という記述内容に関する研究である。また、学習者である児童生徒たちにどのような知識を身につけさせようとしているのか、という教育的な役割について研究することであると理解できる。

すなわち、本論では「教科内容研究」によって民族学校用の「モンゴル語教科書」にはどのような内容が記述され、その内容には、どのような知識や文化が盛り込まれ、また、その記述内容がどのように変遷しているのかを明確化にすることを第一の目的とした。そして、その教科書の記述内容、文章、叙述の構造などが児童生徒にどのような教育的で文化的な役割を果たしうるかについても検討し、その役割の是非について述べた。

第五章では、近年、民族学校の「国家統編教材」が義務化されたことによる民族教科書内容の変遷と、前章でも言及した教科書本来の役割である、教育的で文化的な役割というものを明確化することを図った。この調査と分析によって、民族学校の義務教育段階における「モンゴル語教科書」の記述内容について比較分析を行った。

第六章では本論の分析対象として提示した「モンゴル語課程標準」と「教員用参考書」の記述内容について分析と考察を行った。具体的には、この「モンゴル語課程標準」と「教員用参考書」について、各学年・学習段階における学習目標、学習や教学の重点、および教学に関する留意点に焦点を当てて分析したうえで、「モンゴル語教科書」と「モンゴル語課程標準」、そして「教員

用参考書」の 3 項目の関連性と相互作用について検討を行った。

まず、学習目標については、小学校 1～6 学年において、児童たちの道徳意識教育の向上、興味関心の育成を図っているものの、初級中学校 1～3 学年においては、学習資質や能力の向上、民族や国家を愛する心構えを養成することも主要な目的とされた。

次に、教学評価については、従来のただ教師から評価するだけの一方通行型の方式から、クラスメイト同士での評価や、必要に応じて保護者からの評価なども有効的に活用する双方向型の教学評価を導入することが推奨されるようになっていた。

さらに、教科書の編纂については、教科書内容が児童生徒の発達段階に応じた内容であるとともに、文化の多様化や正しい価値観を強調した内容でもありながらも、民族の伝統文化の継承と発展、および国民としての意識形態の養成も重視したものであることが強く推奨されている編纂方針であったことを確認することができた。

以上の調査と考察によって、まず、「モンゴル語教科書」による児童生徒たちの学習資質や能力の育成については、初等教育段階では、児童たちの語学力による基礎知識を身に付けることを重視することをはじめ、学習意欲、興味関心を養成することを目的としつつ、初級中等教育段階においては、生徒たち自身による問題発見と、その問題を解決する主体的な学習能力の育成と向上までが重視されていることが判明した。

次に、「モンゴル語課程標準」においては、民族教科書における教育的な役割として、民族性や国民性、および多文化教育に関する役割をも果たすべき内容として推奨されていることが判明した。しかしながら、実際の教科書内容では、多文化教育に関する内容の記述はほとんどないことが明らかになった。

終章では、本論の各章のまとめ、および本論で明らかになったこと、さらに民族教科書編纂における今後の課題を提示した。